とある世界での過去と現在

kan_sta_ku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある世界での過去と現在

【Ｎコード】
Ｎ７６９２Ｔ

【作者名】
ｋａｎ＿ｓｔａ＿ｋｕ

【あらすじ】
銀行強盗から女の子を救い
気がついたらとあるの世界に……
そこで少年はどう生きるのか
そして明らかになる過去……

なんだかんだで1番最初に書いたのはこれなので、一番未熟かもです

皆さんの暇つぶしになれば幸いです

感想、アドバイスなどもらえると嬉しいです

―PROLOGUE―

「昼飯どうするかなぁ…
てか現金無かったんだった。銀行いかなきゃ」
一人の少年は銀行に入っていく

「よしお金下ろしたし昼飯食べｎ…「動くな!!」え?強盗?」
銃を持った男が立っていた
銀行員にバックを渡し金をいれさせる

バックを渡された銀行員は恐怖の為か手が震えて金を入れるのに手間取っている

「おい!早くしろ!!」

男が銀行員に向かって銃を構える

と、同時に男の死角にいた警備員が男に飛び掛かる

強盗は抵抗して銃を撃とうとしているが警備員に抑えられているので、銃口は警備員の背後に向いている

そこには女の子が震えてしゃがみ込んでいた

「陽子危ない！」

母親が叫ぶ

「あれやばいでしょ！！」

少年は女の子の方へ走り出す

「まだ打つなまだ打つな…間に合えぇ！！」

少年は女の子を抱え母親の方に放り出す

と、同時に銃声が鳴った……

―第1話　新たな生活―（前書き）

くどいようですがお見苦しくてすいません

―第1話　新たな生活―

「う、うぅ、ん？ここどこだ？」

（一人暮らし向けのマンションみたいな部屋だなぁ
誰かの家なのかなぁ）

「誰かいませんかー？」

少年は大きめの声で言ってみるが返事はない

（どうなってるんだ？そういえば俺、銃で撃たれて…あれ？もしかして記憶喪失！？）

「落ち着け、冷静に、名前！高上　奇羅、誕生日！5月15日、年齢！12歳…
はぁよかった大丈夫か。
てかこれじゃ自己紹介じゃん」

（うわぁ1人でなにやってんだろ恥ずかしいぃ…んなんだあれ）

奇羅は机の上に紙が置いてあるのを見つけた

ー・ー・ー・ー・ー

本校への編入にあたって

登校は5月10日

制服は出来次第寮のほうへ配達いたします
詳しいことは追って連絡いたします

……

……柵川中学校

ー・ー・ー・ー・ー

(編入？俺いつ編入なんかしたかなぁ
てか前の学校どうするんだよ

入学したばっかりじゃん…まあとにかくこの学校行ってみるしかないか

にしても柵川中学ってどこかで聞いたなぁどこだったかなぁ）

♪♪♪♪♪～

（わっ！ビックリしたぁ電話か）

「はい、高上です」

「もしもし私柵川中学校の者ですが、高上さんは“外”からの編入ですよね？」

「外？外と言うと…？」

「えぇともちろん学園都市のですが」

「あぁ学園都市の…え？学園都市ぃぃ！？

（学園都市ってまさかここってとあるの世界？そういえば柵川中って初春と佐天が通ってたあれか、いやでもあれはアニメとかマンガの…でも）」

「あの、高上さん大丈夫ですか？」

「へっ？あ、あぁすいません大丈夫です」

「そうですか、ではその確認でしたので、では」

「あ、はい、さようなら」

ツーツー、カチャッ

（信じられないな。でも全部つじつまが会うし）

奇羅は落ち着かないようで部屋の中を行ったり来たりする

「よし！とりあえず外出てみるか」

奇羅は情報収集も兼ねて散歩に行くことにした

ー第2話　能力と遭遇ー

（やっぱり学園都市みたいだなぁアニメで見たことある風景だ…でもまだやっぱり信じられないな）

奇羅がしばらく歩いていると

「やめてください！！」

1人の女の子が4人の不良に囲まれている

（4人か、4人ならなんとかなるか…）

奇羅は実は運動神経がよく、体術も結構得意だったりする

「おい！やめてやれよ！」

「あぁん!?なんだてめぇ、何か文句あ…「今のうちだ逃げろ」「でも…」「俺なら大丈夫だから」「はい、ありがとうございます」…おいてめぇ！…ふざけやがって！お前らいけぇ！」

リーダーらしきやつの命令で3人が襲いかかってきた

まず2人が両側から挟み撃ちしてくる

奇羅は1人を掴んで盾にする

盾にされたやつはもう1人の蹴りを受けダウン

次に気絶した不良を投げつけ怯んだところに回し蹴りを入れダウンさせる

「てめぇ、よくも！」

3人の残り1人が殴り掛かってくるがすれすれでかわして、後ろに回り込み首筋に手刀を入れダウンさせる

「さあ、どうする？」

奇羅が残りの1人をあえて挑発してみる

「ふん！俺はそいつらのようにはいかないぜぇ、なんせ俺はレベル4の発火能力だからなぁ！」

そう言って不良は手に火を点す

（うわっ！やばっ！ここ学園都市なの忘れてた！）

「どうすっかなぁ…はぁ…」

一方、茶髪のショートヘアで常盤台の制服を着た少女…すなわち御坂美琴は寮までの道を走っていた

（やばい！門限間に合ｗ「ドーン！！」へ？何？爆発？）

美琴が音がしたほうを見ると轟音と共に火柱が上がっている

美琴は少し考えてから音のした路地へと入って行った

「ほらほらどうしたさっきまでの威勢は！！」

不良が連続で火を飛ばしてくる

奇羅はそれをかわす

（もうかれこれ5分は避けてる…さすがに体力的にきついよ…何か打開策は…）

「はぁ、そろそろ飽きたなぁ、じゃ、これで終わりだぁ！！」

不良は先程より大きい火を飛ばして来る

奇羅はまたかわす

「今度はそう簡単にはいかねぇんだよ！！」

不良が手を振りかざすと火は再度奇羅に向かって来た

（やばっ！！よけられないっ！！）

奇羅は火に飲み込まれ壁に吹き飛ばされた

美琴が現場にたどり着き陰から覗くと、不良が少年に向かって火を飛ばしている

（発火能力…レベルは3以上はありそうね）

少年は軽いステップでかわしているが、だいぶ疲れているようだ

（一応先にアンチスキルに連絡しときますか。もう少し耐えなさいよ）

美琴はアンチスキルに連絡してから助けに入ることにした

しかし、連絡が終わってすぐ、不良の操作した火にぶつかり少年は吹き飛ばされた

（あんなのまともにくらって、やばいんじゃない！？）

美琴は少年に駆け寄り声をかける

「アンタ！！大丈夫！？しっかり…うわっ、酷い傷…」

「あーあ、つまんねぇ。まぁ無能力者なんてこんなもんか」

不良はそういい捨て立ち去ろうとする

「ちょっとアンタ待ちなさいよ!!」

美琴は、不良に怒鳴る

「あぁん!?何だお前?てめぇもそいつみたいになりてぇのか?」

不良は火を手に点す

「出来るもんならやってみなさいよ!!」

美琴は体から青白い電気を放出する

「へぇお前は少し楽しめそうだなぁ、じゃ始めから行きますか」

不良は手の火を特大の塊にしている

(あんなの向こう側の壁に張り付いて避ければ…って避けちゃだめね後ろにはコイツがいたんだった…電撃で打ち消すにしても巻き込んじゃうし…)

と美琴は考えつつ後ろの少年を見る

するとさっきまであった傷や火傷がなくなっていた

（治ってる!?もしかして肉体再生?…なら巻き込んじゃうかもしれないけどっ…）

そうこうしているうちに不良が火の塊を飛ばしてくる

「う、うぅ」

奇羅がおぼろげながら意識を取り戻し前を見ると、目の前には制服を来た少女、そして不良が火の塊を作りだしている

そうして不良はその火の塊を少女と奇羅の方に飛ばしきた

奇羅は無意識に火に向かって手をかざした

すると火が消えていく

（俺、今能力使った!?）

そこで奇羅は意識を再び手放した

美琴は火を打ち消そうと電撃を放とうとするが、突然火が小さくなり消えてしまった

（な、何が起こったの?）

「て、てめぇ何を……う、うわぁ!!」

不良は手当たり次第に火を放つが攻撃がきかなかったのに混乱しているのか全く当たらない

美琴は冷静に電撃を不良にぶつけ、不良を気絶させる

（さっきのって何だったの？もしかしてコイツ？でも気絶してたはずだし…）

美琴は後ろで気絶している少年に目を向ける

少年は穏やかな顔で呼吸をしていて、起きそうにない

美琴は寮の門限が過ぎているのも忘れて、少年に付き添っていた

ー第3話　謎の手紙と本当の能力（ちから）ー

「ん?うぅぅん…」

（あれ?ここは…?）

奇羅は目を覚まし、周りを見回す

「あっ!起きた?…御坂さん、男の子おきたよ」

アンチスキルの人が部屋の外に声をかける

（御坂?…えっ!!まさかさっきの女の子って…）

「アンタ、もう起きて大丈夫なの?」

美琴が部屋に入ってくる

（やっぱりかぁー!!!）

「うん、大丈夫。なんかいろいろ心配かけちゃってすみません」

奇羅は深く頭を下げる

「へっ?べ、別に心配なんて／／「はいはい、いろいろ話したい事は後回し。先に事情はなしてね」…はい」

奇羅と美琴は路地であったことを話した

「わかった、2人とも、もう完全下校時刻すぎてるから気をつけてね、あぁあと御坂さん寮には連絡しといたよ」

奇羅と美琴はアンチスキルの人に礼を言って出た

奇羅と美琴はたまたま帰る方向が同じだったので途中まで一緒に帰ることになった

「そういえばアンタの能力何?」

「それが俺にもわからないんだよね、学園都市来たばかりだし…それと俺、名前は高上奇羅だよ。いつまでもアンタって呼ばれるのは…ちなみに中1」

「それもそうね…私は御坂美琴。私も中1よ。…話を戻して、分からないってことは何か能力使えるわけ?」

「いや、さっき、けが勝手に治ったでしょ?だから肉体再生とかかなぁって…」

「じゃああの火を消したのはどうなるのよ?」

「いやぁ、あれは何ともいえないな…実際俺がやったっていう自信もないし」

「そう…」

美琴は納得がいかないがこれ以上聞かなかった

「まぁでももうすぐ転入でシステムスキャンあるからその時分かるかもね」

美琴はそれを聞いてすぐに答えた

「じゃあ、これも何かの縁だし、メルアド交換しましょ…能力わかったら教えなさいよ!!!」

「あ、あぁ…了解」

(絶対後者の意味の方が強いよな!!、まさか能力次第じゃ、勝負!とか言われるんじゃ…)

「ほら!早く携帯出す!」

「あぁ、悪い悪い」

奇羅は美琴とメルアドを交換した

「じゃあ私こっちだから…ちゃんと連絡しなさいよ!!」

「わかってるって、じゃあな」

奇羅は美琴と別れた

奇羅は少し迷ったが無事寮にたどり着いた

「？…手紙？」

ポストに白い便せんが入っている

「どれどれ？」

ー・ー・ー・ー・ー

親愛なる奇羅へ

起きたらいきなり学園都市で驚いたでしょう

信じられないかもしれないけど、今起きてることは真実です

暮らしていく上で

お金に関しては学校から口座に納金される上、私も少し納金しますので安心してくださだい

そして、次にあなたの能力について説明します

能力名は粒子操作（パーティクル・オペレーション）

あらゆる物の粒子を操作できる能力です

強力な能力です

奇羅なら上手く使えると信じていますよ

それでは検討を祈ります

近しい、今は遠い、者より

ー・ー・ー・ー・ー

（何だろうこの手紙、何で俺のことこんなに知ってるんだ？怪しい…近しい、今は遠い者って誰だ？）

奇羅は考えるがこんな人物心当たりはない

（それにこの能力…ちょっと試してみるか）

奇羅はコップに少しの水を入れ水が浮くようにイメージする

すると水はふわりと浮き上がる

（おぉすごい！）

今度は水を分解する

するとみるみるうちに水は見えなくなった

奇羅はマッチを持って来て水があったところに火をかざす

すると

「ボン！！」

と燃え上がった

「うわっ！！」

近くにあったティッシュに引火してしまった

（やばっ！早く水を！！…ん？まてよ路地のとき、火を消せたよな…能力は粒子操作…そうか！！なら）

奇羅は燃えてるティッシュの周りから酸素をどけて、二酸化炭素を集めるようイメージする

すると燃え上がっていたティッシュが鎮火された

（なるほど…あの時は無意識にこれをやったのか…けがが治ったのは自分の体の１部分を粒子化し再構築したってところか…）

「ってうわぁ机焦げた…そうか」

（机の焦げた所を粒子化っと）

すると机は綺麗になった

（はぁもう無意味な能力の行使はやめよう疲れるし）

奇羅はベットに倒れ込み夕飯も食べずに寝てしまった

その頃、とある研究所

「フフフ、ハハハハハ！コイツおもしれぇ能力じゃねぇか研究しがいがありそうだなぁ」

暗い部屋で白衣を着た男がパソコンを見ている

パソコンのディスプレイには先程の路地での出来事が映し出されている

突然部屋と扉が開いた

扉の所には全身黒ずくめの男がたっている

研究員は侵入者の顔を見ようとしたが暗いのでよく見えない

「お前は見てはならぬ物を見た。奇羅に危害を加えるやつは排除する」

「お、お前はだれだっ」

「答える必要もない、どうせ覚えていられないのだからな」

次の瞬間

研究所から爆音する。跡形も無くなり

そこには黒づくめの男ただ一人だけだった

「奇羅をお前らみたいなのに渡すわけにはいかない…」

男はそう呟きその場から一瞬で消えた

ー第４話　転入とまた強盗ー（前書き）

新たなオリキャラ登場です

ー第４話　転入とまた強盗ー

♪♪♪♪♪～

目覚ましがなっている

「う、うぅぅ、ふあぁぁ今日は初登校かぁ」

そう、今日は奇羅の転入の日である

路地での１件以来

奇羅は美琴と学園都市の案内という名目で何回か出かけ、学年が同じというのも手伝いかなり仲良くなった

（いよいよだな、まぁまだ初春と佐天はいないだろうけど、でもがんばりますか）

奇羅はそういきごんで寮を出た

（おっ、ここかー）

奇羅は美琴に１度案内してもらったので、迷わず無事に柵川中学にたどり着いた

入口には教師らしき人が立っている

「君が、高上君だよね」

「あ、はい…あっあの時はどうも」

よく見たら路地での1件の時のアンチスキルの人だった

「僕が君の担任になったt…道柴だよ。これからよろしく」

「あ、はい。道柴先生、こちらこそよろしくお願いします」

「ハハハ、そんなかたくならなくて大丈夫だよ」

2人は教室にたどり着いた

「じゃあ僕が呼んだら入ってきてね」

そう言って教室に入っていった

「はい！みんな席につけー！」

教室に道柴先生が入ってくる

「今日は得に伝達事項はなし、でも転入生が来てます」

教室はざわつく「何で今?」とか「男子かな女子かな」などという言葉が聞こえてくる

「はいはい静かに!、じゃあ入って来て」

奇羅は呼ばれたので教室に入った

一斉に視線が奇羅に向けられる

奇羅は少しうろたえたが笑顔で自己紹介した

「高上奇羅です。この学校はもちろん学園都市にも来たばかりでわからないことがたくさんあり、迷惑かけるかもしれませんがよろしくお願いします」

わー!っと教室から歓声が上がる

何人かの女子が顔を赤くしているが奇羅は気がつかない

奇羅は指定された席に座る

「じゃあとりあえず1時間目僕の授業は前半は質問タイム、後半は高上君のシステムスキャンだから自習な」

朝のHRが終わり、隣と前の席に座ってる2人が話しかけてきた

「私は水神奈美よろしく♪」

「で、俺が関口海斗だ、奈美とは幼なじみだ」

「俺はさっきも言ったけど、高上奇羅だよ2人ともよろしく、へぇー幼なじみかぁー2とも仲良さそうだもんね、もしかして付き合ってるの？」

奇羅は少しからかってみる

「まさかぁー、それとも海斗、本当に付き合ってみる？」

奈美が冗談に乗ってくる

「な、奈美！なにいってんだ！」

「何？私のこと嫌いなの？」

奈美が上目遣いで海斗聞く

「そ、そんなことないが…」

「あれー？関口君まんざらでもないの？」

奇羅もまた便乗する

「おっ、高上君ノリいいねぇ♪」

「水神さんもね」

「もう！2人とも／／」

海斗は顔が真っ赤だ

さすがに2人はからかうのは止めた

「高上君、私のことは奈美でいいよ」

「俺のことも海斗でいいぜ」

「わかった、俺のことも奇羅でいいよ」

「奇羅の方こそ彼女とかいないのか？」

海斗が反撃とばかりに聞いてくる

「そうだよぉ奇羅君見た目いいんだしさぁ」

奈美も聞いてくる

「いないよー、それに俺そこまで見た目いいわけじゃないだろ」

「またまたぁ、自己紹介の時何人か女の子顔赤くしてたじゃん」

「そんなことないよ、2人の方が見た目いいと思うよ」

実際2人は上の上と言えるほどに美男美女であった

だが奇羅の見た目も良かった…本人の自覚無しだが

奇羅の返答を聞いて2人は

「海斗、もしかして奇羅君って…」

「多分そうだろ…おそらく」

「「鈍感…」」

と呆れていた

海斗と奈美と仲良くなり、質問タイムをなんとか耐えきった奇羅は道柴先生とシステムスキャンをするために学校内のある1室に来ていた

「ここなら大丈夫だろ」

「へっ?道柴先生?ここで何をすればいいんですか?」

「いやちょっと話をね」

「話…ですか」

「まず1つ聞こう、奇羅、君は“本当の”能力を公開するかい?

奇羅は思わず先生と距離をとる

「そんなに警戒しないでくれ、例の手紙を送ったのは僕だよ」

奇羅は少し警戒をとき聞く

「先生が？でもどうして？」

「どうして君のことを知ってるかって？君は覚えていないだろうけど、君が小さい時に会ってるんだよ。その時君の両親に君がこっち…すなわち学園都市に来たときはよろしくって言われてね。まぁ信じるかどうかは君次第だそれでどうする？能力」

奇羅はひとまず信じてみることにした

「うーん、まだ完璧に使いこなせてないので…」

「そうかわかった。上にはレベル３の肉体再生と言っておこう」

「ありがとうございます」

「いいって、それともう一つ教えておこう、これは誰にもいわないでくれ」

「はい、なんですか？」

「…僕の本当の名前は…高上だ…」

「えっ！？それってどういう！？」

ちょうど１時間目終了のチャイムがなる

「じゃあ2時間目遅れるなよ」

と言い残し先生は出て行ってしまった

奇羅はしばらくその場から動くことができなかった

奇羅はなんとか我に帰り教室に戻ってきた

教室に入ると能力について海斗と奈美から聞かれた

「肉体再生のレベル3だったよ」

奇羅は答えた

「へぇーいきなりレベル3ってすごいねぇ奇羅君!!」

「ありがとう。そういえば2人は能力何なの?」

「私はレベル3の空力操作(エアロハンド)だよぉ」

「おれはレベル4の粒子変速(グラヴィトン)だ」

「2人もすごいじゃん!!」

奇羅は2人には本当の能力をいってもいいかとも思ったがいわなかった

放課後、奇羅はお金を下ろそうと郵便局へ行った

しかし郵便局はシャッターが閉まっている

（あれ？今日定休日じゃないよな？）

奇羅が考えていると突然目の前に頭に花飾りをのせた女の子が現れる

（まさか！！これって…）

「あれ？私だけ外！？白井さん白井さん！！」

（やっぱりか…多分この子初春だよな）

奇羅は初春に話かける

「どうした？」

「助けてください！中にジャッヂメントの友達が！」

「わかったよ危ないからシャッターから離れといて」

奇羅は演算を開始する

（自分を粒子化、シャッターの向こうに再構築）

奇羅は郵便局の中に移動する

（よし、成功！）

中には強盗犯と髪をツインテールにした女の子がいた

（よし一応監視カメラ粒子化）

するとカメラが全て跡形も無く消える

「な、なんだてめぇ！どっから入ってきやがった！」

「いやぁちょっと依頼を達成しにきただけだから」

「てめぇなめてんのか！」

強盗犯は鉄球を奇羅に向かって飛ばす
が、奇羅は避けない

鉄球は奇羅の左胸を貫き後ろのシャッター1枚を破壊する

白井黒子は窮地に陥っていた

初春は外に逃がしたものの先輩は自分をかばって負傷

能力は瞬間移動だがまだ自分は飛ばすことはできない

するとシャッターの方に突然少年が現れた

（テレポーターですの？）

強盗犯が少年に向かって鉄球を飛ばすが、少年は避けようともせず貫かれた

（あの殿方、何を考えて…なっ！）

少年にあいたはずの穴はみるみるうちにふさがっていく

（はぁこればっかりは馴れないな）

奇羅は自分の体を再構築する

「はぁひどいじゃないか、こんなとこ穴空いたら死んじゃうだろ？…まぁとにかく、これで正当防衛だよな」

強盗犯はまた鉄球を飛ばすが、奇羅が手を翳す

（鉄球…粒子化）

鉄球は跡形もなく消える

「なっ」

強盗犯は驚いて動きを止める

奇羅はその一瞬を見逃さない、壊れている防犯ロボットの中から電子を操り強盗犯に電気を飛ばし気絶させる

（よし依頼完了）

「そこの君大丈夫か？」

奇羅は黒子に声をかける

「大丈夫ですの、ご協力感謝いたしますの」

「あぁ……今日学んだこと、わすれるなよ、じゃあな」

「あっ、ちょっ…」

黒子は奇羅の腕を掴もうとするが、その手は空をきるだけだった

（あの殿方瞬間移動をしたり、肉体再生や電気を使ったり…多重能力者ですの？）

奇羅は仕方なく銀行でお金を下ろし、帰宅途中だった

♪♪♪～

（あっ美琴から電話だ）

「もしもし？」

「もしもし奇羅？システムスキャンどうだったか気になって電話しちゃった」

「あぁ、レベル3の肉体再生だったよ」

「ふーん…嘘でしょ」

突然電話口じゃなく後ろから声がする

「え…嘘じゃ、ない、よ?」

「へぇーじゃあさっきの郵便局でのは何だったのかしら?」

(げっ!見られてたのか…なんかいやな予感しかしない…)

そして美琴は言い放った

「私と勝負しなさい!!」

(はぁどうしてこうなるんだ…)

2人は河川敷に来ていた

「本当の能力言え!」

「だから嘘じゃないって」

「わかったわ!なら私が暴いてやる!」

美琴が連続で電撃を飛ばす

「うおっ！」

奇羅は横に飛びのいてかわす

「だから嘘じゃないって！」

「じゃあさっきのなんなのよ！あれじゃ多重能力者じゃない！」

最後の一つが奇羅の右足を捕らえるが再生される

「やっぱりこの程度じゃだめか…次はこれで行くわよ」

美琴は砂鉄剣で切り掛かる

「うわっあぶない！、こんなので切ったら死ぬぞ！」

「どうせ再生するでしょう…が！」

美琴は剣を鞭状にした上風に乗った砂鉄も操り、上と横から同時に攻撃する

奇羅は飲みこまれ、適度にくらいながら1部はばれないように砂鉄を操り回避する

そして、砂鉄の嵐から抜け出しけがを再生する

「再生するっつっても跡形もなくなったらどうしようもないでしょ！」

「へぇ、いいこと聞いたわ…これを使うとは思わなかったけどこうでもしないとだめそうね」

そういって美琴はコインをトスする

「うわっ、ちょっ！まっ！」

そして回避行動をとる暇もなく超電磁砲が打ち出される

奇羅は必死に演算する

（対象、電子とコインを形成する原子、粒子化！）

超電磁砲は奇羅にたどり着く寸前で消えた

「やっと本性が現れたわね」

「そんな言い方したら俺が悪人みたいじゃないか…まぁこれを見られたんじゃしょうがないな」

「それで能力は？」

「粒子操作だよ」

「粒子操作？」

「あらゆる物の粒子を操作できるんだ、だからさっきは電子とコインを構成する原子を操作してバラバラにしたってわけ」

「他には何ができるの？」

「例えば粒子化したものを再構築するとかまだ粒子化してから1分くらいまでの間じゃないとできないけどね」

奇羅はコインを再構築してみせる

「あとはこれの応用で瞬間移動もどきとか、一応粒子化しなくても動かしたりすることもできるよ」

「なんでそんな便利な能力隠してるの？」

「便利だからこそだよ、研究所とかに目つけられたらやだし、それに目立つのは苦手だからさ…美琴も言わないでね」

「奇羅の頼みならしょうがないな、分かったわ」

突然美琴が座りこむ

「美琴、どうした？大丈夫か？」

「あはは、電池切れた…」

「しょうがないな寮までおぶって送っていくよ」

「な、何言ってんの！？／／／」

「だって歩けないならしょうがないじゃんそれに門限過ぎてるんじゃない？」

「あっ…でも悪いし」

「気にすることないって」

「じゃあ…お言葉に甘えて」

「じゃあ道案内よろしく」

美琴は奇羅に送って貰うことにした

2人は初め密着しているせいか少しどぎまぎしていたが、少しして馴れ、いつも通り話しながら寮までたどり着いた

「部屋まで飛ばすよ何処の部屋？」

「あぁ、あそこ」

美琴が部屋を指さす

「ああ、了解。じゃあまた今度ね」

「うん、また。また今度勝負しましょ」

「えぇー、それは勘弁、能力の練習ならいいけど」

「冗談よ、またどっか行こうね」

「おう、じゃあ飛ばすぞ」

奇羅は美琴を寮まで飛ばした

（おっ、帰ってきたのね……なんだかんだいって奇羅は優しいわよね、超電磁砲なんて撃たれたら怒って当然だしっさっきだって…って何考えてんだろ／／）

美琴は超電磁砲を奇羅に向かって撃ったことに、心が痛んだので改めて謝罪のメールを送った

それからメールを遅くまでして2人とも寝坊し、学校に遅れそうになったとか…

ー第5話　最強と最弱ともう一人の最強ー

奇羅は寮の近くの喫茶店に来ていた

喫茶店はすごく混雑している

「お客様、…相席であの席なら…ご案内できるのですが…他のお客様はお断りになるもので…」

奇羅は店員が指す席をみる

そこには髪も肌も色素が抜け白い少年が座っていた

（あれってまさか学園都市第1位のあの人だよな、一応接触するいい機会か）

「あ、はいあの席g…（おっと）…でいいです」

「そうですか！ありがとうございます！！」

奇羅は店員に案内され、対面にすわる

机の上にはたくさんの同じコーヒーがならんでいる

奇羅は話かける

「それ、おいしいの？」

対面の少年は答える

「あァ？気に入ってるから飲んでるんだろうがァ」

「それもそうだね、俺もそれにしよう」

奇羅は店員に同じ物をたのんだ

店員がコーヒーを持ってくる

テーブルにはカップが先程の2倍に増えている

「うまっ」

「すげェ飲みっぷりだなァ」

「それはお互い様でしょ」

「ハハ、ちげェねェ」

「おまえおもしれェな、名前は？」

「高上奇羅だよ、よろしく。そっちは？」

「一方通行（アクセラレータ）」

「ふーん」

「おいおい、俺は第1位だぜェ、なんとも思わねェのかァ？」

「別に何も？友達に立場なんか関係ないでしょ」

「友達だァ？」

「うん、友達」

「友達かァ…ハハッそんなこと言うのおめェくらいだぜェ。やっぱおめェ面白ェなァ」

「そうなの？まぁいいやこれも何かの縁だしメルアド交換しようよ」

「まァお前ならいいかァ」

奇羅は一方通行とメルアドを交換した

奇羅と一方通行がそんなやり取りをしているころ近くの席では…

5人の不良が話をしていた

「あいつあの第1位だってよ」

「ちょっとからかってやろうぜ」

「おおいいねぇ」

奇羅と一方通行がメルアド交換をして、5分後

5人の不良が近くを通りかかる

そして一人がコーヒーを奇羅と一方通行に向かってかける

一方通行は反射するが奇羅はコーヒーを盛大にかぶってしまった

不良たちは大笑いしながら店を出て行った

「あつっ…やけどしたぁ」

「大丈夫かァ？」

奇羅はやけどしてしまったがいつもどおり再生する

「大丈夫大丈夫」

「おめェ能力者だったのかァ」

「まあね…こういうこと良くあるの？」

「あァ」

「そうなんだ……ムカつかない？」

奇羅は怒りを表に出しながら聞く

「そうだなァ」

「「じゃあいきますか（いきますかァ）」」

店の近くの路地

「お前ら待てよ！」

奇羅が先程の５人に話しかける

「あいつらさっきコーヒーかぶった奴らだぜ」

不良たちは馬鹿にしたように笑っている

それを奇羅と一方通行は睨みつける

「あぁ？なんか文句あんのか？お前ら俺らの力見せてやろうぜ」

リーダーらしきやつが言う

まずリーダー以外の４人がそれぞれの能力を使い攻撃する

一方通行は全て反射し一瞬で４人はそれぞれの能力で倒れる

「弱っ」

「だなァ」

奇羅と一方通行は呟く

「なんだとぉ」

リーダーが襲いかかってくる

「ここは俺がいくよ」

奇羅が前に出る

電撃を飛ばしてくる。電撃使いらしい

奇羅は演算し電撃を消滅させる

そして能力を使い圧縮した空気をぶつける

リーダーは後ろに吹き飛んで気絶した

「覚えてろ！」

最初にやられたうちの2人が意識を取り戻し、他の3人をかついで逃げていった

「あぁすっきりした」

「だなァ、奇羅お前レベルいくつなんだァ？」

「レベル3だよ」

「本当かァ?、お前手ェ抜いただろ」

奇羅は笑ってごまかした

奇羅は一方通行と別れて今はコンビニで立ち読みしていた

するとＡＴＭのほうから「不幸だぁーっ!」と声がする

(もしかしてこの声は…)

奇羅がＡＴＭの方をみるとツンツン頭の少年がいた

(何て言う遭遇率!?午前は一方通行で午後は上条さん!?)

奇羅は当麻に声をかける

「あの、どうかしたんですか?」

「カードが飲まれちゃって…はぁ不幸だ」

「取ってあげましょうか?」

「え?出来るなら是非お願いします!」

奇羅はカードを粒子化し外で再構築して当麻に渡した

「ありがとう、えっと…」

「あぁ高上奇羅、中1です」

「高上か、俺は上条当麻、中3。当麻って読んでくれていいぜ…いやぁ本当助かったよありがとう。今度何か奢るから連絡先教えてくれ」

奇羅と当麻はメルアドを交換した

そのあと2人は外のベンチでお互いの能力について話した（奇羅は本当の能力を言わなかったが）

その後、ベンチの近くの自販機で当麻が札を飲まれてまた奇羅が取ってあげる一件や当麻がいきなり犬に追いかけられる一件があり、奇羅は当麻が本当に不幸だと思い知らされたとか…

ー第6話　再会と集結ー

奇羅は学校が終わり校舎を出る

奇羅ももう学園都市に来て1年が経ち中学2年となった

美琴はもちろん当麻や一方通行ともよく遊ぶようになり、かなり仲良くなった

奇羅は学校を出ようとしたとき、声が聞こえる

「う・い・は・るぅ～」

（この台詞は…）

奇羅は思わず声がしたほうを見る

「バサッ！」

初春のスカートが盛大にめくられる

「さ、佐天さん！！な、何するんですか！？」

そして奇羅と初春の目が合う

「「あっ…」」

「あぁー！！もしかして強盗の時の！！」

初春が言う

「え？初春知り合い？」

「前に言ったじゃないですか、１年前くらいの郵便局の！！…そうですよね？」

「あ、あぁ…そうだよ」

「やっぱりー。柵川中の先輩だったんですね、あの時はありがとうございました。…私、初春飾利です」

「そうなんですかぁー、私は佐天涙子です。初春からいろいろ話聞いてますよ、ヒーローみたいだったって」

「ちょっと佐天さんっ！」

「いやぁ、そんなヒーローなんてたいそうなことしてないよ、俺は高上奇羅、よろしく。奇羅とでも呼んでよ、みんなそう呼んでるし」

「奇羅先輩ですね！！ところで私たち、私のジャッジメントの友達に友達紹介してもらうんですけど、奇羅先輩も一緒にどうですか！？」

初春が奇羅に聞いてくる

「いや、でも俺みたいな部外者が行ったら迷惑じゃないか？」

「大丈夫ですよ！佐天さんも飛び入り参加ですから！ねぇ佐天さん！」

「そうですよ、奇羅先輩も行きましょう！」

奇羅は2人の押しに勝てず、ついていくことになった

3人は待ち合わせのファミレスの前に到着した。

「あっ！…い、た…」

中では美琴に黒子が抱き着いている

2人と3人が目が合う

その直後美琴の鉄拳制裁が振り下ろされる

「では、紹介しますの。こちらが」

「初春飾利です、よろしくお願いします。それでこっちが」

「佐天涙子でーす。何だか成り行きで来ちゃいましたー！ちなみにレベル0でーす」

「ちょっ、佐天さん」

「私は御坂美琴よ、よろしく、…でそれはいいんだけど、何で奇羅がいるの？」

「お姉様お知り合いですの？、それも下の名前で！…ってあなたは！」

「いやぁ、俺も成り行きってとこ…じゃあ一応、高上奇羅です、よろしく」

「そうですよ、白井さん奇羅先輩はあの時の方です」

「やはりそうでしたか！？わたくし白井黒子ですの！！、あなたあの時…」

「！！、わー！！あー！！と、とりあえず！！時間もったいないから早くどっかいこう！！な！！！美琴！！」

「な！！お姉様を下の名前で！！」

（わー！墓穴掘った！）

奇羅は美琴に目線で助けを求める

「ほら、黒子、初春さんと佐天さん困ってるから…あ、えーと…と、とりあえずゲーセン行こう！早く行こう！！」

美琴は黒子を無理矢理押していく

「ちょっお姉様！！」

それを見て初春と佐天は苦笑いしている

「全然お嬢様って感じじゃないね…」

「上から目線でもありませんね…、それにしても奇羅先輩御坂さんと知り合いだったんですね」

「あぁ、まあね」

（はぁ助かった…）

奇羅たち一行はゲーセンに向かって歩いている

「佐天さん前！」

「えっ？いたっ…すいませ、ん？」

美琴が突然立ち止まり、佐天がぶつかる

しかし、美琴は気にも留めず、手に持ったクレープ屋のチラシを見ている

「お姉様？クレープが食べたいんですの？…それともそのストラップの方ですの？」

「だ、誰が、ゲコ太なんか！！だってカエルよ！両生類よ！」

（そういえば美琴ゲコ太好きだったんな）

奇羅は美琴がゲコ太を好きだと美琴公認で知っている数少ない人物の一人だった

奇羅は美琴のバックにゲコ太のストラップがついているのに気づく

奇羅はさっき助けてもらったので助けることにする

奇羅はさりげなく美琴のバックが3人に見えなくなるような位置に入る

「俺、クレープ食べたくなったし行こうよ」

と言い美琴だけに見えるようにバックのストラップを指さす

「奇羅先輩クレープ好きなんですか？」

「まあね、結構甘い物好きだよ」

美琴は奇羅が話をして3人の気を引いている間に外してバックにしまう

「ありがと」

「いいって、さっき助けてもらったからね」

「お姉様いきなりどうしたんですの？高上さんまで」

「何でもないわよ、ね？奇羅？」

「うん、ほらクレープ食べに行こう！」

「怪しいですの…」

黒子がすごく疑ってくるが2人は笑ってごまかした

「混んでるねー」

クレープ屋には長い列が出来ている

「私、席取って来ます」

「じゃあわたくしも」

「じゃあ2人の分、買って持っていくね」

初春と黒子は席を取りに行く

美琴はあからさまにいらいらしている

「美琴、順番かわってあげようか？」

「え♪…い、いいのよ私はクレープさえ買えれば！」

それを見て佐天と奇羅は苦笑いする

奇羅の番がまわってくる

「お待たせいたしましたこちら商品と景品最後になります」

「えっ…」

奇羅が後ろを見ると美琴が座り込んで落ちこんでいる

「美琴？これあげよ「ホントにいいの！！？」…う、うん」

「ありがとー！」

美琴が奇羅に飛びつく

「ほら、クレープ買ってきな」

「うん♪」

美琴はご機嫌でクレープを注文しにいく

これを見て黒子は…

「なーっ！…お、お、お姉様！？…これは高上さんに制裁が必要のようですわね」

「し、白井さん落ちついて下さい」

突然黒子は奇羅の頭上にテレポートして踏みつけようとする

しかし奇羅は予想していたかのように黒子を受け止める

「！！…なら」

黒子は金属針を飛ばそうとするが…

「あれ？…ありませんの」

「白井、探してるのはこれか？」

奇羅の手には黒子の金属針が全て握られている

「なっ！いつの間に！？」

「白井、人がたくさんいるんだから危ないだろ？」

そう言いながら金属針を返す

「うっ…すみませんですの」

（それにしても何故こんなことが…1年前だって…バンクには肉体

再生となっていましたが肉体再生にこんなことできますの？）

黒子は反省しながらも考える

ベンチにやっとのことで全員集合する

「あれっ？何であそこの銀行閉まってるんだ？」

奇羅がそう言った瞬間

「ドーン！」

銀行のシャッターが吹き飛ぶ

「初春！アンチスキルへの連絡と一般人の避難誘導頼みますの」

「黒子！」

「いけませんわお姉様。ここは、ジャッジメントの出番ですの、今度こそおとなしくしていてくださいな」

黒子はクレープを一瞬で食べ終え、銀行に向かって駆け出す

「早くずらかるぞ！」

「ジャッジメントですの！あなたがたを窃盗、および器物破損で拘束します！」

「「「……アハハハハハ！」」」

「ジャッジメントも人手不足かぁ」

「おこさまは寝てな！」

3人のうち1人が殴りかかる

「そんな三下の台詞は…」

黒子はすれすれでかわし、相手の勢いを利用して投げ倒す

「死亡フラグですわよ」

「てめぇ！」

1人が手に火をともす

（発火能力ですの…）

黒子は横に駆け出す

「なっ、にがすかよっ！」

「だれが…」

黒子は火がぶつかる瞬間にかき消え、突然発火能力者の目の前に現れる

「逃げますの？」

黒子はまたテレポートし発火能力の後頭部にドロップキックをいれる

発火能力者は倒れる

黒子は金属針を使い取り押さえる

「まだ、反抗なさるなら今度はこれを体内に直接テレポートさせますわよ」

「ダメですよ！今広場に出たら！」

「でも！」

「どうしたの？」

「男の子が足りないんです」

「じゃあ私と奇羅と初春さんで…」

「私も行きます！」

美琴は佐天を見て頷く

「御坂さんいました？」

「いないわね奇羅？そっちは？」

「こっちもいない」

ここで奇羅は思いだす

（あれっそういえばこの流れ超電磁砲第１話？って…この後はっ！）

「だめぇー！！」

男の子と佐天に向かって強盗が蹴りをいれようとする

奇羅は一瞬で強盗の横に移動し足を掴んで止める

「許さない…」

奇羅は強盗を睨みつけ、投げ飛ばす

「ひっ、ひいぃぃ」

強盗は車に乗って広場から逃げ出す

「あーあ奇羅キレちゃった…あーなった奇羅は止められないのよね、それに私もムカついたから…」

「「黒子（白井！）」」

「「こっからは俺（私）たちの個人的な喧嘩だから手、出させてもらうよ（わよ）」」

（な、なんてコンビネーションですの）

「奇羅、前に練習でやったあれやるわよ」

「了解…」

美琴はコイントスをして超電磁砲を発射する体制にはいる

奇羅は車の前方に一瞬で移動する

美琴から超電磁砲が発射される

音速の3倍なので逃げる車など簡単に追い付いて奇羅の方へ吹き飛ばすと同時に超電磁砲は消える

奇羅は落ちてくる車に向かって手をかざすと手から先ほどの超電磁砲が突然現れたように車に向かって発射され、車をまた吹き飛ばす

そしてまた超電磁砲は消える

その間に美琴はもう1枚コイントスする
車は再度奇羅と美琴の間辺りに落ちてくる

「「これでとどめだ（終わりよ）！」」

美琴は再度超電磁砲を放つ

奇羅はまた手をかざし、そこから超電磁砲が現れる

二人の超電磁砲は車に直撃する

「「す、すごい」」

初春と佐天がこぼす

4度の超電磁砲が直撃した車はきれいに運転席の周りのみが残っており、強盗は泡を吹いて気絶していた

（あぁ疲れた、コインの形状維持とか電子の操作でただでさえ疲れるのに、車と犯人は守らなきゃだからな…まぁすっきりしたしいっか）

その後奇羅は黒子に能力ついて遅くまで問い詰められたらしい。美琴と常盤台の門限のおかげで、「次会ったときこそは喋ってもらいますわよ！」と言われるだけにとどまったが…

ー第7話　能力検査ー

「もうそろそろきちんと能力検査しないか？」

「俺も最近“いろいろ”（主に白井だが）あったのと、だいぶ能力使いこなせてきたからそう思ってたので別にいいですが…どうしてですか」

「それが、上の連中が感ずきはじめてね、隠すのが難しくなってきてるんだ。それに最近グラヴィトンなど事件も多い、高レベルだってだけで抑止力になるからね、あとはまあ学校からの待遇が良くなるくらいかな」

「わかりましたじゃあそうします」

「じゃあ今すぐここで…っと言いたいところなんだが、設備が悪くてねここに行ってくれ」

先生から地図を受け取る

「！！…ここ常盤台ですよね…」

「あぁそうだよ、嫌なのか？」

「…い、いえなんでもないです、じゃあ行ってきます」

「あぁ待って、さっきも言ったが最近物騒だから付き添いで水神と関口連れて行くといいよ」

「わかりました」

奇羅は2人に事情を話した

「…というわけなんだ付き添いお願いしていいかな、あと能力隠してて本当ゴメン」

「そんな謝らなくていいよぉ、そういう事情ならしょうがないじゃん♪ねっ海斗」

「あぁそうだよ、だからそんな気にすんな」

「ありがとう二人とも」

「じゃあ常盤台目指してしゅっぱーつだよ奇羅、海斗♪」

美琴は学園の園入口に立っている

「せっかくの放課後になんで案内なのよ…久しぶりに奇羅とどっか遊びに行こうと思ってたのに、黒子はジャッジメントで忙しいし」

「美琴？俺がどうかしたのか？」

「へっ？あれ？もしかして能力検査って奇羅？」

「そうだよ…あぁ紹介するよこの2人は友達の奈美と海斗」

「関口海斗です。よろしく」

「私は水神奈美だよ。よろしくね♪」

「2人ともよろしく、私は御坂美琴よ」

「御坂美琴ってあの！？」

「レベル5のっていう意味ならそうよ」

「それにしても奇羅君、御坂さんとなかいいんだね、もしかして…」

「「そんな関係じゃない！！…っ！／／」」

「あれあれ～？」

「止めてくれよ本当にそんなんじゃなくて友達だって…ほら能力検査だから早くいこ」

4人は常盤台に向かった

「じゃあこのプールに向かって能力使って下さい」

「了解です」

奇羅は演算を開始する

プールの水が一瞬で半分になり残った水はプールの側面と底に沿うように移動する

「測定完了、レベ…」

「まだおわってませんよ」

その瞬間バチッという音がして

プールの中で大爆発が起こる

プールはあちこち傷だらけだ

「あちゃー水半分でも足りなかったか」

「そ、測定完了レベル…5」

「レベル5なんてスゴイね奇羅君!」

「いやぁ、奇羅は5だと思ったけどまさかうちの学校のプール壊しちゃうとはね」

「それにしても奇羅何をしたんだ?」

「まず水の半分を分解して水素と酸素に、半分を操作して爆発でプールが壊れないように壁を作った、それから電気で水素に引火させて爆発させたんだ」

「なるほどー、それで予想以上の爆発でプールが壊れたと」

「ハハ、ハハハ…もう少し理科勉強しよう…」

学園の園入口

「じゃあ御坂さん今度遊ぼうね」

「うん、水神さんも関口君もまたね」

2人は用があると帰っていった

「美琴？連れて行きたいとこって？」

「あぁ、ジャッジメントの177支部よ…黒子と初春さんがいる…奇羅はまだ行ったことなかったわよね？それに能力検査の結果早く黒子に言っちゃったほうが…」

「そ、そうだね…」

「ここよ」

「こんにちは」

「御坂さん…あら？」

「こちら黒子たちの先輩の固典先輩」

「初めまして高上奇羅です」

「初めまして、何か困りごと？」

「いや、ちょっと白井に話が…ってあれ？海斗？」

「あらあの子と知り合い？いまグラヴィトンの事件に関して話を聞いてるの、１時間前も爆発があって大変なのよね。あ、別に犯人ってわけじゃなくてグラヴィトンに関連する能力だからよ…ただ可能性があるのがあとあの子だけだから白井さん熱はいっちゃって…」

「あら、お姉様に…高上さん来てたんですの」

「黒子、関口君なら犯人じゃないわよ、だって事件があった１時間前なら私たちと一緒にいたもの、ねえ？奇羅？」

「あぁそうだよ…もう一人水神奈美っていう子もいたし、常盤台中学の人に聞けば分かるよ」

「…そうでしたのいろいろお時間おとりして申し訳ありませんの」

「奇羅、御坂さんサンキューな、じゃあ買い物あるから急ぐわ」

「うん海斗、気をつけてな」

「了解」

海斗は帰って行った

「それで、わたくしにお話とはなんですの？」

「あぁ俺の能力につい「スゴイですよ白井さん！」…」

「なんですの？初春、話の腰を折らないでほしいですの」

「新しいレベル５が現れたみたいですよ！能力名は粒子操作…名前は出てませんね」

それを聞いて美琴と奇羅はつぶやく

「「あっ…それって俺（奇羅）の事？」」

そして一瞬の沈黙…

「「えええぇぇ！！」」

「レベル５ってどういうことですの！？」

「粒子操作ってどういう能力なんですか！？」

「ふ、２人とも、お、落ちつけ説明するから」

奇羅は能力について説明する

それを見て美琴は苦笑いしか出なかった

数分後…

「お茶入れて来ますね」

「！！…わたくしがいれてきますわ！！」

「黒子？…また変なこと考えてないわよね？」

「そんなお姉様、第一こんなたくさん人がいるところで変なことできませんの」

「…それもそうね」

黒子はお茶を入れにいく

「お待たせしましたの」

黒子はお茶を持ってくる

♪♪♪～

そこで突然支部電話がなった

「はい…はいすぐに向かいます」

「白井さん初春さんまたグラヴィトンよ被害が大きいみたいだから全員で行くわよ…御坂さん高上君、留守番頼めるかしら」

「了解です固典先輩」

3人は急いで出て行った

「ジャッジメントも大変だな…」

「……」

「美琴？どうした？」

美琴は少し顔が赤く、息が荒い

「顔赤いな、熱か？…って酒臭っ」

「奇羅…」

美琴がじりじりと近寄ってくる

「み、美琴、お、落ち着け…」

（いつ酒なんか…白井か！？）

奇羅は白井に電話する

「高上さんこちらは仕事中ですの、用があるならメールで…」

「おい！！白井！！美琴に酒飲ませただろ！！」

「わたくしがそんなこと…あー…前にお姉様がいらっしゃったときに私がすり替えていたような気がするような…しないような…ハハハ…ハハハ」

「どうすんだよ、うわっ！！」

美琴が倒れこんできて、奇羅は下敷きになる

美琴は顔を近づけてくる

「わー！！美琴ストップストップ！」

「奇羅…私、奇羅のこと…ＺＺＺ」

美琴は奇羅の胸の上で寝てしまった

「ふぅー、寝ちゃったか…も最後、何て言いかけたのかな？」

最後はやっぱり鈍感な奇羅であった

後々、黒子は奇羅と美琴から制裁を受けたのは言うまでもない…

ー第8話　グラヴィトン事件ー

午後１２時…

「はぁー」

４人の女の子に囲まれた1人の女の子?が盛大にため息をつく

この女の子（奇羅）が不幸な状態になっているのは１０分前にさかのぼる

奇羅、美琴、黒子、佐天、初春の5人がファミレスで話をしている

「皆さん今日は何しましょう?最近はグラヴィトン事件のせいで忙しくて、私と白井さんが揃って非番なのは久しぶりですからね」

「と言っても事件のせいで閉まっている店が多いですの…」

「じゃあしょうがないから常盤台の寮でのんびりする?黒子も初春さんも忙しいから疲れてるだろうし」

「お姉様?寮は男子禁制ですの。高上さんが行けませんわよ?」

「そうだったわね…」

「なんか方法ありませんかね…ん?」

佐天は奇羅をじっと見る

「ん?どうしたの佐天?顔になんかついてる?」

「え?…いやぁそうじゃなくて…ちょっと思いついたというか…」

「何を?」

「奇羅先輩が常盤台の寮に入る方法ですよ」

「どんな方法ですの?」

「ずばりっ!!…女装です!!」

「「「「じょ、女装!!?」」」」

「いやいや佐天なんでそうなる」

「だって奇羅先輩ってなんかかわいい系な顔じゃないですか?…絶対似合うと思いますよ」

「いや、似合う似合わないって問題じゃないでしょ!!3人もなんか言っt…っておい!!美琴!!白井!!その服どっから出した!?初春も赤くなってないで止めろ!!う、うわぁ!!ジワジワ近づいてくんな……ぎゃー!!!」

となったわけである

「「「「か、かわいい…」」」」

「はぁ…（当麻ここで使わせてもらうぜ）不幸だぁ」

「奇羅ちょっと声高くなってない？」

「仕草も女性そのものですの…」

「奇羅先輩まさかそんな趣味が！？」

「それはない！！断じて違う！！これはな…ここに来る前に一緒に暮らしてた人に主にこういう系統の服の着せ替え人形にされてな…だんだんエスカレートして仕草やらなんやらを叩き込まれて…はぁ」

「と、とにかくこれで寮には行けるわね」

常盤台中学寮…

「うわぁシックぅ」

「ベットもフカフカぁ」

「きれいな部屋だな」

奇羅、初春、佐天は口々に感想を言う

「そう？ありがとう…って佐天さんと初春さんは来たことあるじゃない」

「いやぁ何度来てもなんか感動しますよ」

「それは、もちろんわたくしとお姉様の愛の巣ですもの、当然ｄ」

ガン！！

「はうぅ」

「ただの寮を勝手に愛の巣にしないでくれる！？」

「よーし、荷物検査開始ぃ」

佐天はベットの下から箱を取り出し中のパンツをあさり始める

「佐天？わたｓ…俺は男なんだよ？」

「えっ？…あっ…あまりにかわいくて違和感ないんで忘れてました♪」

「う、うぅ（涙）」

「「「「うっ…やっぱりかわいい」」」」

♪♪♪～

黒子の携帯が鳴る

「はい…はい、すぐに戻りますの…ちょっと市部に行って参ります」

「分かりました、白井さんまた遊びましょうね」

黒子は寮を出て行った

「あっそういえばＳｅｖｅｎｔｈＭｉｓｔ行きません?あそこなら開いてますよ」

「いいですね！」

「そうと決まれば行きますか」

一行はＳｅｖｅｎｔｈＭｉｓｔに向かった

ＳｅｖｅｎｔｈＭｉｓｔ…

美琴がいきなり立ち止まりパジャマを指さす

「ねぇ、これかわｉ「うわぁ、今どきこんなの着ないよねぇ」「私も小さい時は着てましたけど、今はちょっと…」…そ、そうよね、ハハ、ハハハ」

「?…御坂さん、私たち下着見てきます」

佐天と初春は奥に歩いていった

「はぁー」

美琴はため息をつく

見かねた奇羅が声をかける

「いいんじゃない？」

「えっ？」

「着たいなら着れば？パジャマなんだからいろんな人が見るわけじゃないし」

「そうね…そうよね！！私買ってくr「げっ、ビリビリ！」…あーっ！なんでアンタここにいるのよ！」

「この子の付き添いだよ！」

「あっ、ジャッジメントのお姉ちゃん」

「あぁ、この前の…それより勝負よ！」

「なんでそうなるんだよ！」

「はぁー、美琴、当麻落ち着いて、周りの迷惑になるから」

「ご、ゴメン」

「すいません…ってあれっ？なんで俺の名前知ってるんだ？」

「うぅ…当麻なら分かってくれると思ったのに…」

「えっ？ビリビリ…誰？」

「奇羅よ、高上奇羅」

「あぁ奇羅か…って奇羅ぁ！？」

「そうだよ、いろいろあってね…」

「ふ、不幸だな」

「うん…」

「お兄ちゃんあっち行きたい」

「あぁ分かった、じゃあまたな」

当麻は女の子を連れて歩いていった

「お待たせしましたぁ」

初春と佐天が戻って着ました

「奇羅は服見なくていいの？」

「あぁわたｓ…あぁもう…俺はいいよ」

♪♪♪～初春の電話が鳴る

「はい…場所は？…それならちょうど私いるので避難誘導します！」

「ここで重力子の加速を観測しました、佐天さんは避難を、すみま

せんが御坂さん、奇羅先輩は避難誘導お願いします」

誘導を終えた美琴と奇羅は外にいた

「御坂！奇羅！女の子居なかったか！？」

（すっかり忘れてた、このままだとっ）

「ちょっ！奇羅！」

奇羅はＳｅｖｅｎｔｈＭｉｓｔに走っていく

「お姉ちゃん、お兄ちゃんがこれ渡してって」

初春が女の子からぬいぐるみを受け取ろうとした瞬間、ぬいぐるみは大きく歪む

初春はぬいぐるみを投げ出し女の子を抱え込む

その瞬間３人がたどり着く

美琴は超電磁砲を打とうとするがコインを落とす

当麻は右手を前に突き出す

が、ぬいぐるみは爆発しない…

「ふぅ、間に合ったね」

奇羅は当麻と美琴に微笑んだ

（（かっ、かわいい））

奇羅は二人がそんなことを思っているとはしるよしもない

ーオリキャラ設定ー（前書き）

新キャラ、または新情報が入ったら随時更新する予定

ーオリキャラ設定ー

高上奇羅

１４歳

見た目　上の中、カッコイイというよりはかわいい系

小学生の時は結構モテていたが自覚なし

両親は小さい時に行方不明に、それからは隣の家に住んでいた若い女性（通称、舞姉さん）の家に居候していたらしくその女性に着せ替え人形（主に女の子の服の）にされていたらしい

舞姉さんに鍛えられ料理がうまい

中学になってからは1人暮らしをしていた

身体能力が高く体術は得意、武道は未経験だが、武道をやっている人にも勝ってしまうほど

現在、御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子、上条当麻、一方通行、水神奈美、関口海斗と友達

性格は基本的にだれにも優しく、友好的である

能力：レベル５粒子操作（パーティクルオペレーション）

水神奈美

１４歳

奇羅が仲良くなったクラスメイトの一人

明るい性格で、楽しいことが好き

海斗とは幼なじみ

能力：レベル３、空力使い（エアロハンド）

関口海斗

１４歳

奇羅が仲良くなったクラスメイトの一人

比較的真面目で幼なじみである奈美の事をよく気遣かっている

能力を活かせるよう小さな金属板を持ち歩いている

能力：レベル４、量子変速（シンクロトロン）

道柴先生

４５歳

下の名前は不明

奇羅たちの担任の教師、アンチスキルにも所属

本当の苗字は高上らしく、奇羅の知らない過去を知っている謎の人物

ー第9話　少女の作戦と0との決闘ー

午前9時…

♪♪♪～

「うっ、うぅぅ…なんだよ、せっかく休みなのに…って当麻か…もしもし」

「もしもし奇羅か？」

「そうだよ、不良にでもからまれた？それとも財布無くした？それとも…」

「そうじゃないって、今日空いてるか？」

「空いてるよ」

「じゃあ何かしないか？誰も空いてるやついなくてさぁ」

「いいよじゃあこっち来なよ…15分後にきてね」

奇羅はジュースやお菓子を用意しておく

『ピンポーン』

「はーい、開いてるから入っていいよ」

「お邪魔しまーすっと…奇羅、部屋綺麗だな」

「まあね、じゃあ…とりあえずゲームでもやる？」

2人はゲームを始める

数時間後…

「あっそろそろ昼だね、当麻昼飯食べてく？」

「あぁ、いいのか？」

「いいよ…というかそのつもりだったしね。じゃあちょっと待ってて」

（うーん昼飯だしラーメンか何かでいいか）

ちなみにスープは奇羅のオリジナルである

奇羅は手際よく作っていく

「出来たよー！…はいどうぞ」

「じゃあ頂きます」

「どう？当麻？」

「うまい！うまいぞ奇羅！こりゃ店出せるんじゃないか？」

「そっか、よかった当麻の口に合って」

その頃ファミレスでは…

美琴と佐天と初春が話していた

「御坂さんって好きな人とかいるんですか？」

佐天が切り出す

「なっ！？…どうしていきなり？」

「まぁいいじゃないですか」

「そうですよ、それでどうなんですか？」

「初春さんまで…まぁ気になるかなーって人なら。か、勘違いしないでよ！まだ好きってわけじゃないんだから！」

「「誰ですか！？」」

「そ、それは…えと／／」

「（初春、御坂さん気になるだけって言ってたけど、本当は好きなんだよね？）」

「（私もそう思います。相手は多分…）」

「「（奇羅先輩だよね…）」」

「2人で何小声で話してるの」

「な、何でもないですよ！ねぇ佐天さん！」

「そ、そうですよ！それで誰なんですか？…もしかして奇羅先輩ですか？」

「（さ、佐天さん！）」

「（ここは私に任せて！初春！）」

「そ、そんなわけないじゃない！た、確かに奇羅は優しいし付き合いも長いけど…」

「じゃあ私奇羅先輩デートに誘っちゃおうかなー」

「だ、だめ！奇羅はだめ！奇羅は私がっ！」

「「あっ…」」

「へっ？…あ／／」

「やっぱり奇羅先輩でしたね」

「うぅぅ／／」

「こんなに赤くなってる御坂さん初めてみた」

「御坂さん、奇羅先輩鈍感だから多分言わないと気づいてもらえないですよ」

「で、でも…」

「大丈夫ですよ！私達応援してますよ！」

「そうだ！奇羅先輩デートに誘ってその時にでも言ったらどうですか？」

「で、デート！？」

「そうです！そうと決まれば奇羅先輩の寮に行きましょう！」

「はい！」

「えっ？ちょっ、ちょっと2人とも！」

美琴は2人に連れて行かれた…

『ピンポーン』

「誰だろう、はーい！…あっ美琴じゃんどうしたの？」

「えと…その（2人ともどこかいっちゃったし、変に意識しちゃって言えない）／／」

「奇羅?誰が来たん…ビリビリ」

「なっ!なんでアンタがここにいるわけ!?」

「別に友達の家なんだからいいだろ!」

「ちょうどいいわ、今日こそ決着つけてやるんだから!」

「なんでそうなる!」

「まぁまぁ2人とも落ち着いて、当麻1回やってあげれば?俺が審判やるからさ」

「まぁそれなら…やってやるよ」

「…やっとやる気になったわね」

河川敷…

「じゃあ、殺しはダメだからね、あとは基本的に常識の範囲内ならなんでもありで。それじゃあ始め!」

美琴が電撃を飛ばす

「うっ」

当麻はいつもどおり右手で打ち消す

「やっぱり電撃は効かないか…なら」

美琴は砂鉄剣をつくる

「ちょっ、えものはずるいんじゃない？」

「能力で作ったんだからありなんじゃない？当麻」

「そんな…危ねっ！」

当麻は剣をかわし距離を取ろうと走る

「これにはこんなことも出来るって忘れたの？」

砂鉄剣が鞭になり当麻に襲い掛かる

「前と同じじゃあ意味ないぞ！」

当麻が鞭に触れると強制的に戻される…が美琴も学習していないわけではない

このすきに当麻の後ろに回りこみ今にも超電磁砲発射しそうだ

当麻は急いで振り返り右手を突き出そうとする。間に合いそうだが微妙なところだ

（こりゃあ多分大丈夫だろうけど一応間に入るべきかな）

奇羅は超電磁砲が発射した瞬間、間に入り超電磁砲を粒子化する

「そこまで！」

「奇羅、まだ決着が…」

「いやぁサンキュー奇羅、今のはマジで焦った」

「ゴメン美琴。当麻もこう言ってるし、今のは結構危なかったから…。とりあえず今日はこのくらいにしておいてくれないかな？」

（これってチャンスじゃない！）

「じ、じゃあ奇羅が私のお願い１つ聞いてくれるならいいわよ」

「まぁ、そのくらいなら」

「あっ！こんな時間だ！急がねぇと、すまない奇羅、ビリビリじゃあな！」

当麻は走っていってしまった

「それで美琴、お願いって？」

「あ、明日、私とデートして！／／」

「へっ？デート？俺なんかとでいいの？」

「奇羅だから言ってるのよ！…嫌？」

「まあ、そんなことでいいなら…本当にそんなことでいいの？」

「うん！じゃあ明日9時にいつも待ち合わせる所ね！」

美琴はそう言うとご機嫌で帰っていった

河川敷の近くには一部始終を見て喜んでいた女子中学生2人がいたとか

ー第１０話　パートナーー

（ったく、なんでこんなときに……）

御坂美琴は４人の不良に絡まれていた

「なぁいいじゃねぇか…俺たちと遊ぼうぜ？」

「だから！あんたたちと遊んでる暇なんてないっていってんでしょ！？」

美琴はとうとう痺れを切らし体からバチバチと電気が漏れ出ている

「待たせてゴメン、美琴」

そこに一人の少年がやってきた

「てめぇなんだよ！その子と遊ぶのは、俺達だ！さっさとどっかいっちまいな！」

「あんた奇羅になんて口聞いｔ「俺の彼女が本気で怒らないうちに立ち去ってくれないか？」……（かっ…彼女！？／／／）」

そう、やってきたのは奇羅だ

奇羅は静かに問い掛け、当たりには妙な緊張感が漂う

「……くっ！覚えとけっ！…お前ら行くぞっ」

4人は文句を言いながら去っていった

「ゴメンね、俺がもっと早く来てれば、あと勝手に彼女なんて言って」

「私が勝手に早く来ただけだし、ぜ、全然気にしてないからっ、そ、それより、どうかな？／／」

美琴は両手を広げてくるりと回る

（かっ、かわいい……）

「……イマイチ…だったかな…」

「へっ？いや違う違う、その…可愛かったもんだからつい…な。うん、似合ってるよ」

「そ、そう？ありがと／／／」

「それでどこ行く？」

「うーん、そうねぇ……とりあえずゲーセン！…じゃ、いつもと同じね」

「まぁ……別にいいんじゃないかな、時間ならあるし」

「それもそうね」

2人はゲームセンターに向かっていった

「よしっ！」

「また負けたー！もう、相変わらず奇羅は強いわねぇ」

「美琴も強いじゃん」

「奇羅が強すぎるの！」

「ハハハ…あっ、そろそろ昼ご飯かな？」

奇羅が時計を見て言う

「本当だ、どうする？」

「あぁ、店調べてあるよ」

「そうなの！？」

「うん、せっかくの機会だからね」

「なんか、悪いわね…」

「いいの、美琴は気にしなくて。ほら、早く行こう」

「ちょっ……／／／／」

奇羅は美琴の手を掴み引っ張って歩き出した

「ここだよ」

奇羅はオシャレな外観の店を指さす

「イタリアンなんだけど大丈夫かな」

「大丈夫大丈夫。むしろ好きなほうだし」

「そっか、ならよかった」

2人は店に入っていく

「オシャレねー」

「そうだろ?」

「いらっしゃいませー、あっ奇羅君、待ってたよー」

一人のウエイトレスがやってきた

「流愛さんどうもです」

「あなたが噂の御坂さんかぁー」

「奇羅、知り合いなの？」

「うん、ちょくちょくこの店で手伝いしてるんだ。この人はウエイトレスの波木流愛（なみきるあ）さん」

「はじめまして、よろしくね……ちなみに奇羅君来てから売上が4割も上がったのよ！」

「すごいじゃない！奇羅何したの！？」

「いや、メニュー開発の話し合いに参加したり、普通に営業の手伝いしたり…」

「うん、奇羅君にはシェフの才能あるわ！それに奇羅君がウエイターやるとそれ目当ての人も来たりするし……おっと、案内しなきゃね」

2人は流愛に案内されて窓際の席にすわる

「じゃあ俺はいつもので、美琴は？」

「うーん…奇羅と同じ！」

「はーい」

流愛は厨房へ歩いていった

「そういえば、ウエイターの手伝いって……まさか……」

「ないない！ふつうにだｋ「何？どうしたの？」……なんで来てるんですか！？」

「いやおっきい声だして楽しそうに話してたからさ」

「す、すいません……」

奇羅は恥ずかしそうに謝る

「ゴメンね、お邪魔だったかな？」

流愛は美琴に尋ねる

「い、いえ全然大丈夫ですよ」

「それで、何話してたの？」

「さっき、奇羅がウエイターの手伝いしてたって言ってたじゃないですか、それでその時ｎ「わー言うなー！！」…んー！まかった！まかったから！むぁめてー！」

奇羅はとっさに美琴の口を押さえる

「奇羅君？」

「んー！んー！」

「なんですか？」

「むぐむぐぅ！、むがぁー！」

「そろそろ離してあげないと……」

「へ？…あっ！」

奇羅が見ると美琴の顔は赤くなってきてしまっていた

「ぺはっ！……もうっ！苦しいじゃない！死ぬかと思ったわよ！」

「ゴメン美琴、ほんっと、ゴメン！」

「しかしここまで奇羅君が嫌がることって何なのかしらー？」

「言いませんよ」

「じゃあやっぱり…御坂さん教えてよ！」

「でも…」

「じゃあ……この限定ゲコ太キーホルダーあげるからっ！」

「げっ、ゲコｔ「美琴」はい…」

「じゃあ…プラス、奇羅君のこーんな写真たちを」

「喜んで話させていただきます！」

「やったね！交渉成立ね！」

「ちょっ「「奇羅（君）は黙っててて（なさい）！！」」…えぇぇー！！」

美琴と流愛は顔を寄せ合いひそひそ話しはじめる

「奇羅って……女装……なんですよ」

「本当！？……へぇ今度……かなぁ……」

「やる時……ますからね！」

「……して……するよ」

「何企んでるだ？」

「内緒よ」

「内緒だよ」

「すみませーん」

「「ねぇー♪」」

「あっ、少々お待ちくださーい！…じゃあごゆっくり……御坂さん頑張って」

「えっ！は、はいっ！」

そんなこんなのやり取りがあったしばらく後の2人は…

「あのさ…どいてくれない？」

「黙れ！」

またもや10人もの不良に絡まれていた

「今朝は俺の仲間が世話になったみたいだな」

「今朝？あぁ彼女が絡まれたもんでね」

「でも奇羅は手は出してないわよ！」

「そんなの……知らねぇな！」

3人が木刀を取り出し飛びかかってくる

「美琴、下がってて」

「私も戦うわ」

「ふっ！……わかった、でもできるだけ能力使うなよ」

奇羅は先頭の一人が振り下ろした木刀をかわし、そのまま手を掴み投げながら答える

「えっ！なんでよ！？」

「ほっ！…下手に能力つかって、誰かにジャッジメントに連絡されたら黒子に見つかっちまうぞ…やぁ！…デートしてるの」

奇羅は投げたやつから木刀を奪い2人目の横からの攻撃をかわし、腹に蹴りをいれ、3人目の木刀を受け、そのまま下から切り上げ、相手の木刀を飛ばし、脳天を木刀で叩き下ろす

「それもそうか…わかったわ」

「じゃあはい」

奇羅は木刀を渡す

「ありがと」

「くそっ、次いけぇ！」

今度は5人が鉄パイプを持って走ってきた

先頭の一人は……

カコーン

さっき切り上げて飛ばした木刀が落ちてきて脳天に直撃した

奇羅は走ってジャンプし、その木刀をつかむ

そのまま相手を飛び越え着地し、振り向きざまに横に切り付け、一番後ろのやつを倒す

後ろのやつが倒れたのに気づいた1人が鉄パイプで殴りかかってくる

奇羅は木刀で受け止めるが、木刀はへし折れる

「あぶねっ！」

奇羅はとっさにバック転でかわす

相手はさらに鉄パイプを横に振り追撃してくるがジャンプしてかわし、回し蹴りをいれ倒す

一方、美琴は自分の方にきた2人のうち1人が振った鉄パイプをしゃがんでかわし、下から木刀で鉄パイプを持っている手を狙って叩く

取り落とした鉄パイプを掴みもう1人に向かって投げ、続けて木刀を投げる

相手は鉄パイプはかわしたが木刀を受け倒れる

美琴はそのまま回転して、初めの1人に回し蹴りをする

蹴りは綺麗に顔にクリーンヒットし吹っ飛んだ

「んで、あと君だけなんだけど……」

「くそぉー！！」

最後のリーダーらしき1人はスタンガンを持って走ってくる

そして美琴に襲いかかるが……

「あれ？なんでだ？なんで効かない！」

「はぁー…美琴、最後だしいいよ」

「本当の電撃てのは……こういうのよ！！」

最後の1人は美琴の電撃でたおれた

「あーあ、もう暗くなってきちゃったな、そっちの寮の門限も近いし、そろそろ帰る？」

「あっ…えっと、最後に……うーんあそこの公園行こう、あの寮に行く途中の」

「あぁ、うんいいよ」

「はい、ヤシのみサイダー」

「ありがと…」

2人は公園のベンチに座っている

「どうしたの?さっきから黙っちゃって。何かあった?」

「えっ?何もないわよ?」

「そう?ならいいけど」

「き、奇羅ってさ、す、好きな子とかいるの?」

美琴は恐る恐る尋ねる

「うーん、そうだなぁ…気になるというか、いいなっていう人ならいるかな…」

「そ、そう(なんか言いにくいじゃない!でも言うしかないわよね!こんなところで負けちゃだめよ、私!)」

「じ、実は…奇羅に、い、言いたい事があって…」

「ん?何?」

「え、えっと…私…奇羅の事が…好きなの……私と、付き合って…くれないかな?」

奇羅は驚いた顔をして、そして微笑んで…

「俺でいいなら喜んで！」

「……えっ？いいの！？」

奇羅は頷く

「えっ、だってだって、いいなって思ってる子いるんでしょ！？」

「だって、美琴の事だし…」

奇羅は少し頬を赤らめ、照れながら答える

それを聞いた美琴も顔を赤くする

「私！？なんでっ！？どうしてっ！？」

「そりゃ…可愛いし、正義感が強くて、なおかつ強いし、いつも友達のこと気にかけてて……」

「わかった！わかったから！そんなに褒めたおされるとこっちが恥ずかしいわよ！」

美琴は顔を真っ赤にして言う

「きっかけは初めて学園都心に来た時に見ず知らずの俺を助けてくれて…」

「あー！いいからわかったからっ！」

「あぁもぅ！顔真っ赤だよ、可愛い！」

「もぅっ！やめてって！」

美琴は顔を真っ赤にして叫びながら頭から電気が漏れだしている

「ははっ！ゴメンゴメン……まぁうん、改めてよろしく！美琴！」

「うんっ！」

美琴は笑顔で元気よく頷いた

その笑顔で完璧に奇羅は落とされ、美琴が“気になる”じゃなく“好きな”女の子になったのは、奇羅の内緒の話……

ー第１１話　謎のヒーロー？ー（前書き）

お久しぶりです

更新おそくなってスイマセン

ー第11話　謎のヒーロー?ー

「通報では、被害者は1人の女の子、犯人は3人組の男で…あっ！！白井さん!!次の角を右に曲がった所が現場です!!」

「了解ですのっ!!」

黒子は路地裏を駆け抜けていく

「ジャッジメントですの!!おとなしk……またですの?」

目の前には腰を抜かし座り込んだ少女とすでに縛られて気絶している3人の男だった…

「あぁーもう!!いったいどなたですの!?ジャッジメントでもないのに襲われてる人を助けて歩いてるかたは!!」

「でも助けられた人がいるならその人が見てるんじゃないの?」

「それが突然現れて被害者と加害者の間に割って入り、犯人を一瞬で気絶させて縛ると、顔を見せることもなく瞬く間に去っていくらしいですの…まさか…」

「言っておくけど、私じゃないわよ?だいいち、さっきの事件の時はもう私は177支部に居たじゃない」

「それはそうですけど、事件に首を突っ込むなんてお姉様以外いｎ
「黒子？」…じょ、冗談ですわ」

黒子は先程の事件から支部に戻り、美琴と初春と話しをしていた

「それにしても、初春が調べても尻尾も掴めないなんてどんな強者ですの？」

「すいません、精一杯調べてはいるんですけど」

「でも、別に悪いことしてるわけじゃないんだからそんなに焦って探さなくてもいいんじゃない？」

「ですが、念のためですわ、誰かを助けているから許されてはおりますが、権限無しに他人への能力公使は誉められたことではないですし」

「私は少なくとも、その方は悪意があることはないと思います」

「えっ？どうして？」

「だって被害者はもちろんですが、加害者も無傷なんですよ？」

「確かに、楽しんでたり痛めつけたかったらぼろぼろにするはずよね」

「それに、複数人を相手を無傷で気絶させ拘束…それも通報があってからジャッジメントが到着するまでにそれをするなんて、やはりかなりレベルの高いかたですわね」

「こんにちわー！！」

佐天が元気な挨拶と共に入ってくる

「何話してたんですか？」

「最近１７７支部周辺で襲われた人が通報を受けて駆けつける前に助けられてることが続いてまして」

「あっ！！それって”疾風のヒーロー”ですか！？最近一番ホットな都市伝説なんですけど、名前の通り、襲われた人の所に突然現れて一瞬で悪者を倒して、顔を見せずに去って行くっていう…」

佐天が興奮気味に言う

「と、都市伝説にもなってたのね…」

美琴が呆れたように答える

「都市伝説にはその人物について何か特徴などかかれてはいませんの？」

「それが、どの書き込みも詳しくは書かれてないんですよ、性別でさえ男だって言う人もいればそれに対して女っぽかったって言う人もいるんですよ」

「その書き込みから考えると、複数人居るんでしょうか？」

「中性的な容姿って事も考えられますわ…しかし本当に善意でやっているのでしたらジャッジメントに欲しいですわね」

「確かに、それだけ強くて、犯人を無傷で捕まえられるなんて、ジャッジメントはその人の天職かもね…あっ、私買い物あるからそろそろ帰るわね」

美琴がそう切り出し立ち上がる

「もう行ってしまいますの？」

「私はジャッジメントじゃないんだし、これ以上いたら仕事の邪魔になっちゃうしね」

「それなら私も帰ろっかな、元はといえばこの差し入れ渡しにきただけだし…はい！！」

佐天はケーキらしきものを初春に渡す

「じゃあ後でね黒子」

「初春も頑張ってね」

そう言い２人は１７７支部を出て行った

「それで御坂さん、なんでこんな状況になってるんでしょう？」

「私にも分からないわね…ったく」

2人は近道をしようと路地を抜けようとしたところ5人組の男に絡まれてるのであった…

「2人ともかわいいじゃん、俺たちと遊びに行かねえ?」

「うっさいわね、私は綺羅っていう彼氏が居るの!!あんたたちなんてお断りよ」

「そんなこといわずにさぁ、ちょっとくらいいいじゃねーかよー」

「あぁもうしつこいのよ!!」

美琴が電撃を放とうとすると…

間に1人割り込んできた

「あぁ?なんだてめぇ?」

しかしその謎の人物は何もしゃべらない

「おい!!てめぇ!!無視してん…じゃ…ね…えよ…」

一斉に5人の男たちは倒れる

謎の人物は男たちを縛り始める

「御坂さん!!あれ疾風のヒーローじゃないですか!?」

「確かにそうかも、情報どおりだし…」

2人は小声で話す

謎の人物が全員を縛り終わったところで佐天が声をかける

「疾風の…ヒーロー…さん？」

すると、その人物がコケるような動作をする

「なんか最近そんな噂がたってるみたいだけど、知り合いにまで間違えられるなんてショックだなぁ」

「なんだやっぱりそうだったのね」

「えっ！？御坂さんそれってどういう……あれ？」

謎の人物が振り返ると…

「流石に美琴にまで間違えられなくてよかったよ」

「き、奇羅先輩っ！？」

ー第12話　それから……ー

「ど、どういうことですか？奇羅先輩が疾風のヒーロー！？」

「お、落ち着け、ちゃんと説明するから」

奇羅は佐天に質問攻めにされていた

「まず、最初はコンビニに行くのに使ってた道が工事で通行止めになったことだよ、それでこっちの路地を通るようになったんだけど、初めて夜中にここを通った時に女の子が絡まれてさ、それを助けたのが一番最初」

「それでっ！！どうなったんですかっ！？」

「…え、えーと、それからコンビニに行くときによくそういう現場に居合わせることが増えてきてさ、で、あまりにも回数が多いから時間のある時に通ってある種のパトロール的なことしてたわけ、まぁだから実際はヒーローでもなんでもないけどね」

「まぁでも助けてもらった人にとったらヒーローなんじゃない？それと、どうせ割り込むならちょっと待て！！くらい言えばいいのに」

「いやあれは言わなかったんじゃなくて、言えなかったの、人の血液触れずにそれも複数人動かすとなると演算が大変だから、せっかく無傷で捕まえようとしてるのにミスったら死んじゃって俺も犯罪者の仲間入りだよ」

「血液を動かしてたの！？奇羅どんだけ演算能力高いのよ…」

美琴が絶句して呟く

「いやぁ、脳に行く血液を死なない程度に減らすなんて繊細なこと何回もするもんじゃないね、疲れてしょうがない…」

「当たり前じゃない」

「わ、私ハイレベルすぎてついていけない…」

「さてと、そろそろ帰ろっか?俺早く帰って寝ｔ「ジャッジメントですの!!通報…を…受け…て……いったいどういうことですの?」……美琴、もしかしてこの流れ…」

「多分、帰れないわね…」

「そんなぁ…」

「き、奇羅先輩頑張ってください…」

結局、奇羅は美琴と佐天に説明したことを１７７支部で１からもう一度説明するはめになった

「そういうことはジャッジメントにまかせてほしいんですの」

「でもあまりに回数が多いもんだから忙しいジャッジメントにまかせるのは

気が引けちゃって…」

「それでもですわ!!これに触発されてたいしてレベルの高くない方が同じことをして事件に巻き込まれる可能性もあるんですのよ!?」

「……美琴、どう思う?」

「黒子、奇羅も悪気があったわけじゃないんだからさ」

「お姉様!?付き合いの長いわたくしを見捨てるのですの!?」

「黒子より奇羅のほうが付き合い長いわよ!!」

「そうでしたとしても!!最近特に高上さんの肩をもつことが多いですわ!!」

「そ、そんなことないわよ?ね、ねぇ初春さん」

「そ、そうですよ!!か、考えすぎですよ!!そうですよね?佐天さん」

「う、うん、そうだと思うなー、はは、ははは…」

「あやしいですの…」

奇羅は焦りまくりの3人を見て苦笑いを浮かべる

「それで、白井?事件の話はもう終わりでいいの?」

「仕方ありませんわね、では次の話に入りますわ」

「えっ、他にも話あるの？」

黒子は固典先輩のほうを見る

固典先輩はそれに対して頷く

「高上さん、ジャッジメントに入って頂けません？」

「だ、ダメ！！絶対ダメっ！！」

美琴が突然叫ぶように言う

「え？なんで？」

「な、なんでって…その…と、とにかくダメなの！！（奇羅がジャッジメントに入ったらなかなか会えなくなっちゃうじゃない！！）」

その時、１７７支部に１人の女性が入ってきた

「あなたが高上奇羅君かしら？」

「そうですけど、あなたは？」

「「「神奈波さん！！？」」」

「もうっ！！１７７支部のみんなは自己紹介の邪魔をするのが趣味なわけ！？上に報告しちゃおうかしら」

「「「す、すいません…」」」

「うふふ、そんなしゅんとしないでよ、冗談よ」

（（（（冗談に聞こえないわよ（ませんよ）（ませんの）！！！）））

「高上君にちょっと話があるの、一緒にきてくれるかしら」

「えっ？あっはい」

「奇羅が何かしたの！？」

「大丈夫よ取り調べじゃないから、えっと御坂さんかしら？」

「へっ！？そうですけど」

「あなたもいっしょにきていいわよ？」

「はあ…じゃあ」

2人は神奈波に連れられ支部をでた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7692t/

とある世界での過去と現在

2012年1月5日01時52分発行